

鵜殿の視察をして思ったこと

東儀秀樹

少しの知識、信憑性のないうわさ、憶測がむやみに反対論を拡張させている。環境や文化の問題を語る時、理屈なく近代的開発側は悪者になる。

どうしても精神論が支配して、さらにそれに同調することが環境や、エコや、文化に理解を示しているという自己満足な偽善的反対意見を構築している部分も存在する。

もちろん反対意見のすべてがそうだというのではない。「反対意見」というより、「心配意見」という方が正しいはずだ。というのはうわさや憶測の事実関係がほとんど確認されていないからだ。

「心配」という意味では建設側も文化保持側も文化を大事にする日本人としての立場や心情は同じ位置にある。

私のところには反対意見の要素となる問題提示がたくさん寄せられるが、それらをもって現場に足を運んで確かめたり、実際にヨシの採集をしている人の状況などを照らし合わせるとギャップがあることもわかった。

今回、GPSを使った調査や植物のDNAにまで及ぶ研究が始まったため、そういった事実関係がはっきりしてくる。これはいままで誰も手を付けなかった部分だという。

それで反対意見には誤解もあることに気づく。やはり憶測や伝わり方の違いが生じているのだ。

このデータ収集によって、いままでの漠然とした問題の透明化を計ることができる。そういう意味でも現在建設側が行っている調査はとても有意義なものになると確信する。

もしかしたらこのことが、かえって筆策に向けたヨシの育成にいままで以上の効果や可能性を生むのかもしれない。

国内からはもちろん、今や海外からもいろいろな意見が寄せられるが、これらはもはや精神論でしかないということも感じる。現実的でないのだ。現状を分析して見極めた上での意見ではない。

だからといって現時点で現実も決定的なところに無い。つまり、双方ともむやみに同調された反論や意見に左右されること無く現実的で多面的な調査に向き合うことがいま一番優先されるべきことなのだ。

ただもちろん「反対意見」は「心配意見」としてどれもありがたいことには変わらないので、耳を傾けて様々な意見は真摯に受け止めることも忘れてはならない。

今回現場の視察をして、前述したように、建設側も反対意見側ももはや「心配側」という同じステージに立っているということを感じた。このことは反対意見側も理解すべきところだと思う。いまやNEXCOも専門家による検討会を開催するなど、どうしたら筆策のために向けたヨシがより良く育つ環境を作れるか、という思考を大切にしているのが伝わってきた。

共生という理念は双方がプラスになってはじめて意味がでる。それに向かったの努力を感じられた。

さて、今回の調査報告でまた、別の懸念も感じた。筆築用のヨシの収穫の現状である。現在3～4人の人が収穫をしているが、すべて60歳以上の高齢者。そして、この収穫はただたくさん採るというのではない。一本一本選んで収穫する。その選別法やそのための知識も大切に継承されなければならないところ、若手の継承者がいない。もしかしたらこちらの方が危機的だと言えよう。

極論を言えば、DNAなどの研究によって、人為的に操作をして筆築に向けたものだけをまとめて育つように仕向けることも可能になるかもしれない。またそれが、条件さえそろえば鶴殿に限ることなく日本全体に目を向けて考えることは出来ないか、という検討もあり得ることなのかもしれない。しかし、仮にそうなったとしても、収穫する人間がいなくなれば何の意味もなくなる、という問題は変わらない。そのあたりのこともこれから意識して考えていかなければならない。

いずれにせよ、今回の問題はむしろ今後のヨシのためにいい方向に向けた、いままでになかった生産的なキッカケになっているのかもしれないと感じた。

平成25年 6月 12日 東儀秀樹